

栄町りゅうかくじ龍角寺確認調査報告書

昭和 63 年度

財団法人 千葉県文化財センター

序 文

千葉県では、現在までに国分寺跡などを含め40箇所を超える古代寺院の所在が確認されています。これらの寺院跡は、奈良・平安時代における地域の歴史や文化を解明する上で重要な遺跡ですが、発掘調査などにより内容を把握できた例は数少ない状況です。

千葉県教育委員会では、特に重要な古代寺院の規模や時代を解明し、その保存策を講じる資料とする目的で、国庫補助事業として昭和55年度から実態確認調査を実施してきました。

本年度は、印旛郡栄町にある龍角寺の調査を行い、建立直前の集落のあり方や推定の域を出なかった寺域を限定する資料を得ることができました。

このたび、その調査の成果が調査報告書として刊行される運びとなりました。本書が学術的資料としてはもとより、文化財の保護・活用のために広く県民の方々に利用されることを期待しております。

終わりに、調査に当たり多大な御協力をいただいた地元の皆様、栄町教育委員会、調査を担当された財団法人千葉県文化財センターに心から感謝申し上げます。

平成元年3月

千葉県教育庁文化課長

竹内 一 雄

凡 例

1. 本書は、財団法人千葉県文化財センターが千葉県教育委員会の委嘱を受けて、実施した古代寺院跡（龍角寺跡）の確認調査報告である。
2. 龍角寺跡は、印旛郡龍角寺字新房245-1に現存する龍角寺境内に塔跡・金堂跡が確認されており、今回の調査は寺域の確認と周辺施設の存在を探ることを目的とし、龍角寺字東665、字新房167、字釜神484、字新房163-2・164・197-1、字東627番地で実施し、確認調査総面積は600㎡である。
3. 調査期間は昭和63年10月12日から11月11日である。
4. 調査は、財団法人千葉県文化財センター研究部長 堀部昭夫、部長補佐 渡辺智信、古内茂の指導のもとに、班長 大原正義が担当した。
5. 本書の作成・編集は大原が担当し、主任調査研究員今泉潔・大野康男の協力を得た。
6. 現地作業・整理作業で使用した遺跡コードは、329-016である。
7. 現地調査にあたっては、龍角寺区をはじめとする下記の方々から私有地の借用を快諾いただくとともに、多大な御援助を賜った。ここに深く謝意を表します（敬称略）。
小川正義、林田英治、小出民代、大見川利治、伊藤一雄、榊原武夫、林田重治
8. 現地調査から本書の刊行に至まで、下記の諸機関・諸氏から御指導・御協力をいただいた（敬称略）。深く謝意を表します。
栄町教育委員会、龍角寺区、千葉県立房総風土記の丘、千葉県立房総のむら、財団法人印旛郡市文化財センター、伊藤義一、多字邦雄、西野 元

目 次

I 沿革	5
1. 龍角寺の位置	5
2. 龍角寺の変遷	5
3. 龍角寺の研究史	7
II 調査の方法と経過	8
1. 調査の方法	8
2. 調査の経過	10
III 遺構と遺物	10
1. I区の遺構と遺物	10
2. II区の遺構と遺物	15
3. III区の遺構と遺物	16
4. IV区の遺構と遺物	26
5. V区の遺構と遺物	34
まとめ	35
龍角寺関係主要文献一覧	36

挿 図 目 次

第1図 龍角寺の位置と周辺遺跡	6
第2図 調査区配置図	9
第3図 I区遺構分布図	11
第4図 I区トレンチ図	13
第5図 I区出土遺物	14
第6図 II区遺構分布図	15
第7図 II区トレンチ図	15
第8図 III区遺構分布図	16
第9図 III区トレンチ図	17

第10図	Ⅲ区出土遺物(1)	20
第11図	Ⅲ区出土遺物(2)	21
第12図	Ⅲ区出物遺物(3)	22
第13図	Ⅲ区出物遺物(4)	23
第14図	Ⅲ区出物遺物(5)	24
第15図	Ⅳ区遺構分布図	26
第16図	Ⅳ区トレンチ図(1)	28
第17図	Ⅳ区トレンチ図(2)	29
第18図	Ⅳ区出土遺物(1)	31
第19図	Ⅳ区出土遺物(2)	32
第20図	Ⅳ区出土遺物(3)	33
第21図	Ⅳ区出土遺物(4)	33
第22図	Ⅳ区トレンチ図	34

図版目次

図版 1	龍角寺境内 正面全景 金堂基壇	図版 6	Ⅳ区 1.Ⅳ区遠景 2. n トレンチ住居跡 3. j トレンチ 4. j 7 区土偶出土状況 5. j 4 区土偶出土状況
図版 2	龍角寺境内 塔基壇 塔心礎	図版 7	遺物(1) 軒丸瓦・軒平瓦
図版 3	I 区 1. I 区全景 2. a トレンチ 3. a 2 区住居跡 4. b 3・4 区住居跡 5. c トレンチ住居跡	図版 8	遺物(2) 文字瓦・用途不明瓦製品
図版 4	Ⅱ区 1. Ⅱ区近景 2. d トレンチ 3. f トレンチ	図版 9	遺物(3) I 区・Ⅳ区出土の土師器
図版 5	Ⅲ区 1. i 区全景 2. i 区溝 3. 地下式墳	図版 10	遺物(4) Ⅳ区出土の土師器・須恵器 Ⅳ区出土の墨書土器
		図版 11	遺物(5) Ⅳ区出土の縄文土器・石器
		図版 12	遺物(6) Ⅳ区出土の土偶

I 沿革

1. 龍角寺の位置

東国最古の古代寺院として知られる龍角寺は、印旛郡栄町龍角寺（新房）239番地に所在する。現存する天竺山寂光院龍角寺境内に、金堂基壇・塔基壇および心礎が確認されており、本尊の金銅薬師如来座像は、奈良前期様式の仏像として名高い。古代寺院としての龍角寺もその主要伽藍は現龍角寺境内に所在したものと想定される。

印旛沼に臨む大地に大形方墳岩屋古墳をはじめとする龍角寺古墳群（総数124基）が所在し、その北に埴生郡衙と推定される大畑遺跡があり、さらにその北に龍角寺が所在するという位置関係にある。地形的には利根川沖積地から南に伸びる谷とその支谷によって解析され、大地の主軸は南北に伸び、東西300m以上の平坦面を持つ部分もあるが30m程度の括れ部もあるという樹枝状を呈する。龍角寺の所在する平坦面は東側に張り出しを持つ部分であり、東西の平坦面の広がりとしては思いのほか狭い。標高は31m弱を計り周辺では最も高い。また、龍角寺と谷を隔てて北西約100mに、龍角寺の瓦が焼かれた龍角寺窯跡が位置する。

2. 龍角寺の変遷

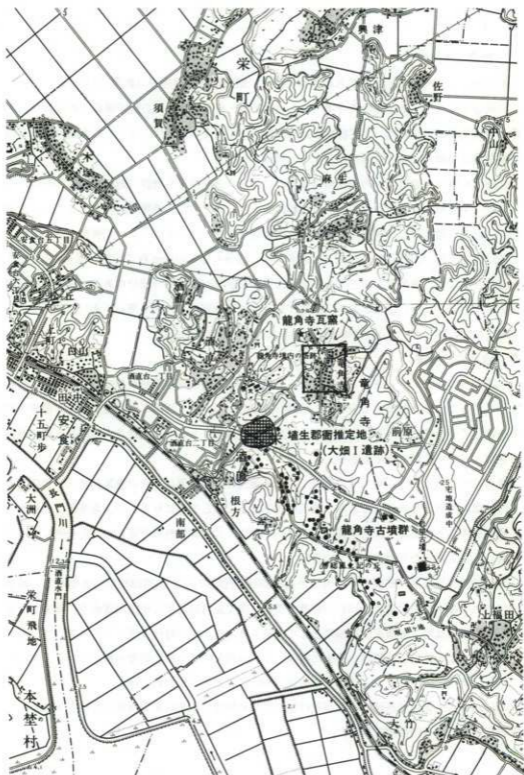
東国最古の寺院の一とされる龍角寺であるが、その変遷を知る手がかりは、度重なる大火をうけていることから極めて少ない。『龍角寺縁起』によれば「和銅二年龍女化現、金像薬師如来を奉じて寺を建つ、天平二年釈命上人再び諸堂を興す」とあり、龍腹寺・龍尾寺と結ぶ龍神伝説によって知られる寺でもある。

鎌倉時代にあつては、埴生庄の地頭である千葉氏の庇護を受け、その後足利義氏、泰氏、さらには北条実時、その子孫である金澤氏が埴生庄の領主となるにおよんで、金澤氏との縁から称名寺を中心とする、千田庄東禅寺、千葉庄千葉寺、大須賀保慈恩寺等との交流を通じて「学問寺」として栄えたものとされている。

天正19(1591)年朱印高20石戸、境内地16000坪が寄進される。当時24坊の坊舎をもつ。慶長15(1610)年領主松平忠良より10石の寄進を受け、慶安元(1647)年に東叡山寛永寺の直末となる。江戸時代後半は領主稲葉家の祈願所として崇敬をうける。江戸時代に度々火災にあっている。

明治になると比叡山延暦寺の嫡末に復帰し、明治初年には4坊の坊舎が残っている。しかしこれも、龍角寺村がほとんど焼けた明治19(1886)年の大火で失われている。

昭和25年、元禄年間再建の本堂が老朽化したため解体し、それまで西側の台地の下にあった庫裡を台地上の境内西側に移した。



第1図 龍角寺跡の位置と周辺遺跡

— この地図は国土地理院発行の2万5千分の1地形図(下総滑川・成田)を使用したものである。 —

3. 龍角寺の研究史

龍角寺が、東国における最も古い寺院として注目されたのは、昭和6年氏家重次郎氏によって、本尊銅造薬師如来座像が奈良前期様式の仏像として注意され、氏の紹介により関野貞氏が昭和7年5月にこれを鑑定し、さらに文部省国宝調査員の調査を経て昭和7年11月25日に国宝に指定されたことに始まる。以来、龍角寺については、国宝である「銅造薬師座像」そのものをはじめ「出土瓦」「塔心礎」「縁起」などにわたり数多くの研究がなされてきた。これについては、多字邦雄氏による「下総龍角寺・研究史」「早稲田実業学校研究紀要」9 1974に詳しい。ここでは、発掘調査のみに限ってその研究の足跡をたどってみたい。

昭和22年及び23年に早稲田大学考古学研究室と東洋美術史研究室によって発掘調査が行われたのが学術的発掘調査の最初と言えよう。その結果は滝口宏「下総龍角寺址調査」「史観」32で報告され「(1)法起寺式伽藍配置をもつ、奈良時代時期の創建である。(2)回廊址の痕跡を追究復元し得たこと。(3)石製鶏尾の発見。(4)瓦窯址の発見がなされたこと。」が掲げられる。

昭和46年3月から4月および8月に、金堂基壇・塔基壇を中心とする調査が実施された。その成果は「下総龍角寺調査報告」によれば、「(1)金堂基壇については、間口五十一尺・奥行き四十一尺で、その方位は現磁北に対して7.2度北に偏し真北に近い。現基壇は江戸時代に本堂建設のために旧基壇に対して東と北に増築拡大されている。(2)塔基壇は、現存する芯礎を中心として一辺三十六尺で、その方位は金堂基壇と一致する。金堂基壇の中心と塔芯礎の中心間の距離は一一二尺で、これを結ぶ線はほぼ真東西線上にある。(3)塔跡北側12mに3個の柱穴を検出し建物跡が確認された。(4)金堂・塔の中心線上南に伸ばしたトレンチでは門跡が確認できなかった。また、北に伸ばしたものでも遺構は認められなかった。回廊址の存在については存在を断ずることはできない。」が述べられている。なおこの調査時には、龍角寺瓦窯跡の調査も実施されており、地下式無階段登窯の1号窯、地下式有階有段登窯の2号窯が調査されている。

昭和51年に、早稲田大学考古学研究室によって、金堂基壇東側に塔基壇に対応するようにある高まりに対して調査が実施され、これについては自然のものであることが明らかにされた。

昭和62年に、首都圏自然歩道整備事業「関東ふれあいの道」に伴い、薬師堂の東側にトイレが建設され、この事前調査が(財)印旛郡市文化財センターによって実施されたが、遺構は確認されなかった。

龍角寺の周辺では、龍角寺古墳群の測量調査を中心とした調査、殖生郡衙推定地の調査、周辺の宅地造成などに係わる調査が近年急速に進められており、集落基盤も含めた古墳群から郡衙・寺院という変遷を知るに房総でも最も良好な資料の整いつつある地域となっている。

II 調査の方法と経過

1. 調査の方法

今回の調査は、現龍角寺境内については、昭和22, 23, 46, 51, 62年と度重なる調査がなされてきたこともあり、調査の対象とせず周辺地域において龍角寺の寺域限界と関連施設の所在を探ることをその主たる目的とした。

地形の上から龍角寺の寺域を検討するなら、現龍角寺境内のうち台地平坦面は東西約100m、南北約130mを計るが、東西については北西部分が舌状に張り出すため方形の区画として寺域を想定するなら東西75m 南北約130mが限界になる。この場合でも南西部分には斜面地を含むことになり、平坦面での方形区画を想定するなら、龍角寺の場合地形的制約からかなり狭小なものになってしまう。

一方伝承としては、南については現龍角寺山門から南約250mに「南大門跡」と称せられる所があり、水道工事に伴う道路開削の際帯状に色の変った部分が確認されたとのことであり、龍角寺の長い歴史の中で何時の時期であるかを別とし何等かの遺構が存在する可能性がある。また同様に南約125mに「中門跡」と称せられる所がある。北については、塔跡から北に約120m「放光院跡」と称される畑から小仏像が出土しており瓦片も採集される。

調査区は、現龍角寺境内を中心として東西300m・南北300mの範囲から選択した。寺域の四至を探る方法としては四方向にトレンチを伸ばすことが最も効果的であるが、龍角寺境内を除くと人家の密集率はかなり高く、畑地および庭地で耕作および生活に支障をきたさない部分となるとかなり限定され、必ずしも調査の最適地とはなり得なかった。

調査区・トレンチ 調査区は調査に着手した順に、I区・II区……V区とした。調査はトレンチ法を主体とし各トレンチはI区からV区まで通しでa・b・c……qトレンチとした。また、各トレンチは5mごとに区切り1・2・3……で表示した。各区の所在と面積は以下の通りである。

I区 龍角寺(東) 665番地 180m² a・b・cトレンチ II区 龍角寺(新房) 167番地 63m² d・e・f・gトレンチ III区 龍角寺(釜神) 484番地 73m² hトレンチ・i区 IV区 龍角寺(新房) 163-2・164・197-1番地 274m² j・k・l・m・n・o・p V区 龍角寺(東) 627番地 10m² qトレンチ

遺構・遺物 確認された遺構については、当該調査区の性格を明らかにするために一部については内部の調査を実施したが、基本的には確認にとどめた。また、遺物についてはトレンチ小区を単位として取り上げ、遺物番号は遺跡コード(329-016)調査区(I区～V区)トレンチ小区(1・2・3……)を組み合わせて表記し、一括遺物を0001とし、以下位置を記録したものを0002から順次付し、現場調査・整理・注記に一貫して使用した。



第2図 調査区配置図

— この地図は、栄町発行の2千5百分の1都市計画図を使用したものである。—

2. 調査の経過

調査は、10月12日に着手しⅠ区から順次実施し、設定・確認・一部精査・記録・埋め戻しの作業を一部重複しながら進め11月11日に終了した。

Ⅰ区の調査は、a・b・cのトレンチで遺構の確認をおこない、数多くの住居跡が確認され、一部遺構内の精査も実施した結果、古墳時代後期から奈良平安時代に至る集落跡であることが判明した。実測、写真撮影等の後10月20日には埋め戻しまで終了した。

Ⅱ区については、10月17日に調査に着手し、d・e・fのトレンチをビニールハウス及び作物を避けて設定調査した。全体に削平されており攪乱も著しく明確な遺構は検出できず僅かにピット列2列を調査したに止まった。実測・写真撮影の後、10月26日には埋め戻しまで終了した。

Ⅲ区の調査は、10月21日に着手しⅰ区については面的調査を実施し、hトレンチは出来得るかぎり北方向へ伸ばして調査を実施した。瓦片がかなりの量検出され、土壇・地下式壇・溝等も検出され、龍角寺に直接関係する可能性の最も高い地区として精査に努めたが、いずれの遺構も底部近くまで近現代の遺物が混在する状態でその構築年代を明確にできるものではなかった。実測・写真撮影の後10月28日には埋め戻しまで完了した。

Ⅳ区は、10月26日に調査に着手しⅱトレンチから順次pトレンチまで設定調査したがその配列はかなり不規則なものになった。西半部は、縄文後期を中心として中期から晩期に至る多くの遺構・遺物が確認され、特に12点の土偶は注目されるものであった。n3区で確認された平安時代住居跡については一部精査を実施した。東半部は70～80cmの削平が窺え基跡・柱穴等が検出された。遺物はいずれも近世以降のものである。実測・写真撮影の後11月11日に埋め戻しを終了して全ての調査を終了した。

V区は11月9日に調査に着手したが、狭少な範囲であり削平されていることが窺えたため11月10日には、記録の上埋め戻して調査を終了した。

III 遺構と遺物

1. Ⅰ区の遺構と遺物

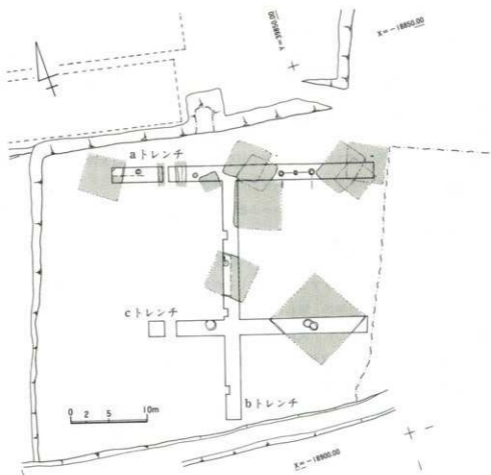
Ⅰ区は龍角寺南東の東側に張り出した台地平坦面で、西側で現龍角寺の山門部門に繋がるが調査地の畑地部分が最も標高が高く約31mを計る。東側は北側からの主谷が迫り比高約20mを計る。南北両側に支谷が入り込むためやや独立丘的であり、西側は2m程度低くなる。

トレンチは、東西45m南北40mの畑地に作物を避けて北端に略東西方向のトレンチを設定しこれをaトレンチとした。これに直交して南北のトレンチをb、aトレンチの南20mに東西のトレンチcを設定した。

遺構 a トレンチの西端 a 2 区で住居跡を確認した。a 2 区から西側は表土層が 1 m 以上と厚く現況では平坦な畑は北西部分は埋め立てられたものであることが明らかになった。この住居跡については、一部床面までの確認をおこない、東側の壁面を検出した。地表面から床面までは約 2 m を計る。壁高は 25cm、壁溝が確認でき幅 10cm、深さ 8~10cm を計る。住居内には焼土が充満し災害住居であることが窺える。住居内からは図示出来るような資料は検出されなかったが古墳時代後期の土器片が 2 点検出され該期の住居跡と推定される。

a 3 区では南北に走る溝 2 条を確認した。東側の溝についてはトレンチ内を調査したが、幅 130cm 深さ 20~25cm を計る浅い溝で性格は明らかでない。瓦細片 2 点が出土した。

a 4 区ではピット 1 基と南側にのびる 1 辺 2.5m の方形になると思われる落ち込みを確認した。住居跡としては規模が小さいが、焼土が混じる覆土の状態からして住居跡と判断した。時期は明らかでない。



第 3 図 I 区遺構分布図 (1:500)

a 5区では住居跡の北西コーナーを確認し、さらにこれに重複してa 6区にかけて住居跡を確認した。いずれも一辺4~5m程度の住居跡と推定される。西側の住居跡からは確認面ではあるが杯(第5図3)が出土している。

a 6区から7区に東西に並ぶ3基の柱穴を検出し、掘立柱建物の一部と推定した。耕作に伴うトレンチャーが南北にはしるため遺存状況は悪いが、各柱穴の径60cm前後、深さは両側のものが20cm中央のものが35cmを計り、芯間の距離は180cm前後を計る。柱穴の覆土からして掘立柱建物の一部と見て誤りはないものと思われる。地形的には棟方向は南側に伸びるものと思われる。

a 7区から8区にかけては住居跡が確認された。明確に判定できるのは西隅の確認できる住居跡のみであるが、8区の一部に貼り床が確認できボーリングステッキによる深さの確認等から推定して3軒の住居跡が重複しているものと思われる。また、a 8区の北壁に近くカマドの痕跡と思われる山砂が認められた。出土遺物としては最も東側の住居に属すると思われる杯(第5図4)が確認面ではあるが出土している。

b 1区から2区にかけての東側に焼土の入った一辺6m強の住居跡が確認された。

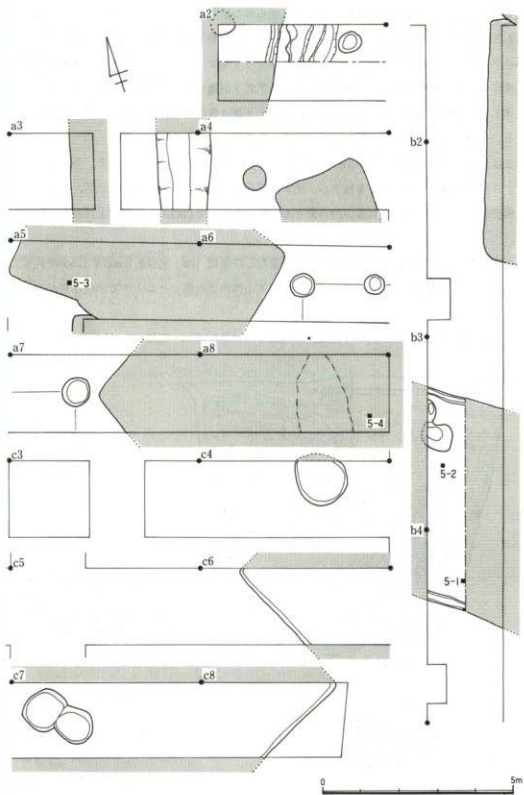
b 3区から4区にかけて住居跡が確認され、トレンチ内西側の1m幅の遺構内精査を実施したトレンチャーで南北に寸断されているものの遺存状況は良好で一辺が5m前後の住居跡であり、壁高は65cm前後を計り、幅20cm前後深さ5cmの壁溝が巡る。床面は堅くしっかりしており、北壁から1mの位置に主柱穴を検出し、径60cm深さ40cmを計る。遺物としては南壁から50cm離れた床面に完形の甔(第5図1)が伏せられた状態で検出され、杯(第5図2)も床面から検出された。これらの遺物から見て古墳時代後期の住居跡と考えられる。

c トレンチは表土層が薄く15cm程度でローム層の遺構確認面に達する。c 4区で径140cm深さ20cmの土壌を検出した。

c 6区から8区にかけて推定一辺約9mの大形の住居跡を確認した。壁高は25cm前後を計る。トレンチャーによって床面まで切られており遺存状況は悪いが、小破片ながら古墳時代後期の遺物が認められ該期の住居跡と思われる。

c 7区に2基の土壌を検出した。大形住居の床面に2基の土壌を検出したものでトレンチャーによる攪乱で明確でないが、覆土は著しく黒色味を帯びた軟質土で住居を切って構築されたものと思われる。平底の土壌で住居跡床面での計測値は西側のが径100~110cm深さ30cm、東側が径90~100cm深さ10cmを計る。西側の土壌から杯(第5図5)が墳底から25cm浮いた状態で出土した。

以上、I区からは不確定な部分はあるが、古墳時代後期から平安時代におよぶ整穴住居跡10軒・掘立柱建物1棟・溝2条・土壇3基他を確認できた。一般的な集落跡の色彩が強く、僅かに瓦細片2点の出土が龍角寺と直接的に結び付く程である。

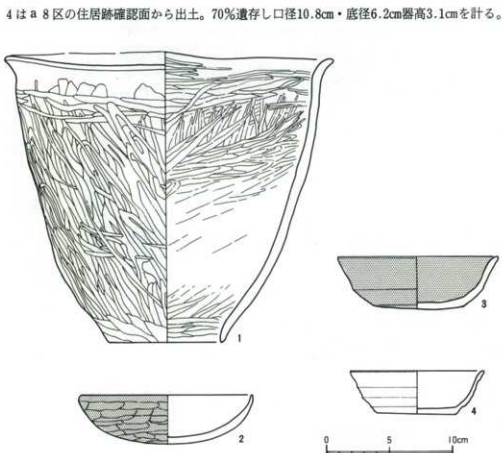


第4図 I区トレンチ図 (1:100)

遺物 1は甗でb 4区の住居跡床面から伏せられた状態で出土した。完形で口径26.5cm・底径9.3cm・器高22.9cmを計る。底部から徐々に開く、器形最大径は口縁にある。器面調整は口唇部はヨコナデ、胴部外面はヘラケズリの後に縦位の丁寧なヘラミガキが施され、胴部上端に一部横位のミガキも施される。下端は斜位のヘラケズリが施される。内面も縦位のヘラミガキを主体として斜位・横位のミガキが施され、上端・下端は横位が主体となり、丁寧に調整されている。外面に3ヶ所、内面に帯状に黒変している部分がある。

2は1と同じ住居跡床面より出土。50%遺存し口径13.9cm・器高4.0cmを計る。外面は横位ヘラケズリの後横位ヘラミガキを施すが、僅かに接合痕を残す。口唇部はヨコナデ、内面は入念な横位のヘラミガキが施される。内外面とも暗褐色を呈し光沢があり、漆仕上げの可能性が高い。

3はa 5区の住居跡確認面から出土。90%遺存し口径13.1cm・底径6.7cm器高3.6cmを計る底部回転糸切り、体部下半回転ヘラケズリ、体部上半及び内部ロクロナデで赤色塗彩が施される。

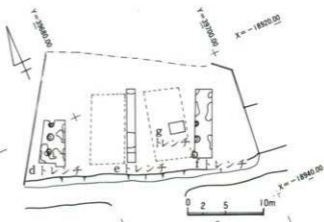


第5図 I区出土遺物(1:3)

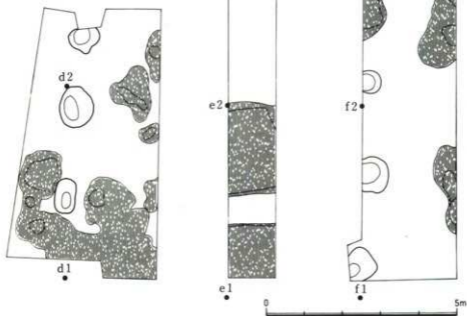
2. II区の遺構と遺物

II区は現龍角寺の山門から南に約125mの「中門跡」と伝承される地区で民家の中に残る周辺より1m程度高い畑地である。

遺構 全体に削平されており、15cmの表土を除くとハードローム面が露呈する。ゴミ穴など攪乱が著しく明確な遺構と判断できるものは存在しなかった。しかし、dトレンチとfトレンチに南北に3基のピットがそれぞれ並び建物の柱列の可能性を残す。いずれも径30~50cm深さ30~40cmのピットで、覆土も他の攪乱とは異なり締まっており、面的な確認が必要であろう。土師器片、陶器片が少量出土したが図示できるものはない。



第6図 II区遺構分布図 (1:500)



第7図 II区トレンチ図 (1:100)

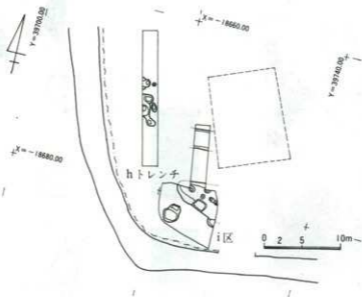
3. III区の遺構と遺物

III区は、現龍角寺境内と道路を隔てて北側の畑地で、今回の調査地としてはV区とともに龍角寺の主伽藍に最も近く位置する。現在は畑地になっているが、昭和20年代前半までは北側に住居家屋があり、南半分は竹林及び杉林であったとのことである。調査時には道路に接した部分から機材倉庫までの間の杉の抜根作業中であり、既に瓦片が出土しつつあった。このため調査はこの部分については面的調査としi区とした、別に畑地の西側に北方向にトレンチを伸ばしhトレンチとした。

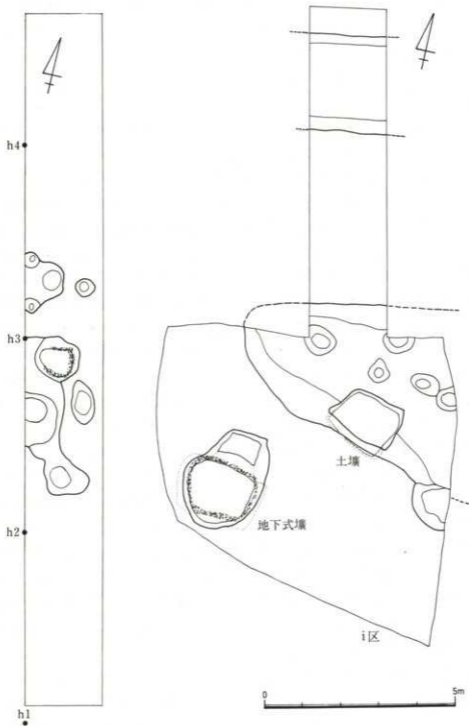
遺構 hトレンチは表土層が平均30cmで、h1区では瓦が比較的纏まって出土した。h2区から3区にかけて不定形のピット群が切り合うように検出された。深さは20cm程度から160cmまで様々で、性格・年代とも把握に困難なものである。h2区の最も北側のピットは、径125cm・深さ164cmのもので底部は方形に近く、底部縁の部分から立ち上がり20cm程まで3方に青白色粘土が貼られる。

i区の南西隅に地下式墳が検出された。天井部は崩落しており内部からは瓦片も出土したが、ガラス片なども混在した。横穴部の規模は最大幅228cm・奥行き160cmの方形を呈し、高さは150cm前後と推定される。竪穴部は幅120cm・奥行き95cm・横穴部との段差を70cm計る。横穴部の底部から四方の壁の立ち上がり約15cmにかけて青白色粘土が貼られていた。

i区の北側部分に深い落ち込みを確認し、瓦片の出土も多いため重点的に精査したが、最大幅180cm・深さ80cmのU字形の溝になりi区の北西を起点として東にのびるものであった。



第8図 III区遺構分布図 (1:500)



第9図 III区トレンチ図 (1:100)

遺物

瓦は整理箱で約4箱出土した。しかし調査地が伽藍を外れた地点とういこともあり、出土絶対量は少ないといえるだろう。大半を丸瓦・平瓦が占め、なかでも平瓦の占める割合は高い。ほかに龍角寺特有の文字をしるした文字瓦が3点ある。

軒瓦

軒丸瓦4点、軒平瓦4点、ほかに軒丸瓦との接合部のみの丸瓦資料が1点ある。資料はいずれも小片で全容を知り得るようなものはない。軒丸瓦1はなかでも保存状態の良いものであるが、かつて地円で採集されたものを今回の報告に併せて紹介するものである。

軒丸瓦 畿内山田寺の亜流につらなる瓦当文様。下総を中心に上総北部まで龍角寺式軒丸瓦として広く分布する。内区は単弁8弁蓮華文、弁中央に長方形の突起した子葉をおく。間弁は頭を楔状に整え盛り上がる。外区には高い3重圏の圏線が巡る。1は外区を欠く。丸瓦部も取り付部分の剥落痕跡のみを残して遺存しない。2は約6分の1の瓦当面が残る。丸瓦との接合部分がなく、瓦当下半の資料であることがわかる。表面・破面に粘土塊の范詰痕跡を確認でき、粘土詰は外区に紐状の粘土塊を詰め、瓦当中央部では少なくとも3枚の粘土塊を入れている。表面は磨滅し子葉が不明瞭。胎土・色調は1に似る。3は蓮弁の2葉と間弁しかない。2同様、瓦当下半部に相当する。胎土は緻密で、表面に光沢をもつ。4は外区の3重圏だけが残る。周縁の内側下端にやはり粘土紐の接合痕跡を確認できる。丸瓦の取り付けはなく、瓦当下半部になる。瓦当側面に指紋の圧痕が集中する。胎土は1に近く、色調は3に似る。

なお龍角寺ではこれまでに最低2種類の軒丸瓦が知られている。両者のもっとも大きな違いは中房の蓮子数である。蓮子数1+5と1+10の2者がある。蓮子数1+5のものにはさらに中心蓮子に大小の2種がある。蓮子数1+10の中心蓮子は大の部類になる。蓮子数1+5の中心蓮子の大小2種の范種についてはともかく、中心蓮子を多くつくるものについては同一范で、蓮子数の違いは范の彫り直しの結果による可能性もある。つまりまず蓮子数1+10では2個の蓮子が傷によって連結する部分があり、新作の范の段階から傷范を使用したとは考えにくいこと。蓮子数の増加は蓮子間に新たな蓮子をおくことで可能であること。そして拓本の重ね合わせで蓮弁との位置関係が一致するところがあること。以上の理由によるが、今回の資料中それを実証できるものはなく、今後の課題とせざるをえない。

軒平瓦 ロクロ挽き重弧文の1種のみ出土。したがってすべて桶巻作りになる。全体のおける資料はないが、たとえば顎の接合部分で剥落した資料では、断面に弧文の山が半分残り3重弧文であることがわかる。龍角寺でこれまでに出土しているのもすべてロクロ挽き3重弧文で、今回新たに追加する内容はほとんどない。5のみが顎部と平瓦部があって唯一厚みが分かる。それ以外の3点は顎部か平瓦部のいずれかである。1は顎部に平行叩き目がある。凹面は布目

を笥で削ってほとんど消去し、部分的に残っている布目を観察しても布目の重複は確認できない。確証はないが顎部の叩きは桶巻作りの最終工程のなかで行われたもので、凸型上で行った叩きではないであろう。6・7は顎部を残すが叩き目を残していない。また剝離面にも叩き目は転写されていない。8は平瓦部側の資料。凹面は縦に笥で削って調整する。また凹面の瓦当面近くにはクロロ挽き目の工具のアタリを残す。顎の深さは5が8.2cm, 6が8.4cm, 7が5.5cm。なお塗朱痕跡は確認できなかった。

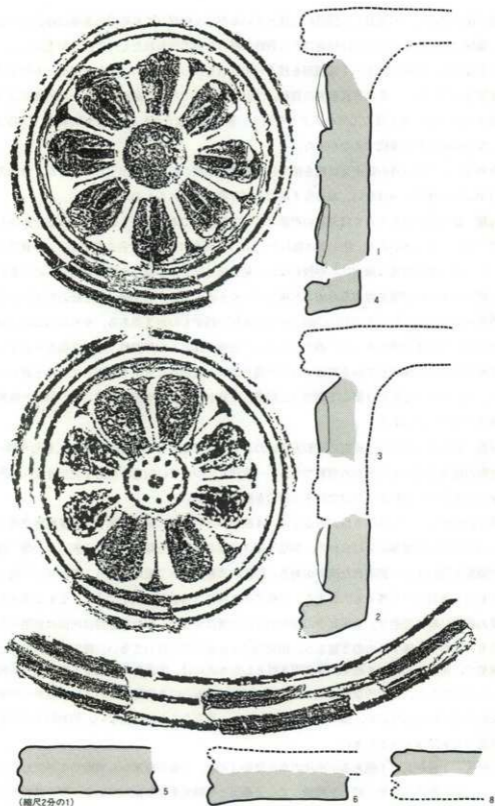
龍角寺ではこれ以外の軒平瓦に笥を使用した葡萄唐草様の軒平瓦が出土しているが、今回の資料中にその種のものは無い。おそらく絶対量が非常に限られるものであろう。

丸瓦 狭端部の残るものでは丸瓦の形態はすべて行基葦である。第1次成形には粘土板作りと粘土紐作りの2種がある。粘土紐は幅1.5～3cmで、接合の密着度で各々差があり、密着性の高いものでは接合痕跡は線状にしか残らない。粘土紐はほとんど輪状に積み重ねたものと思われるが、一部には空隙を埋めるために充填しているものもある。粘土板・粘土紐の巻き付け方向のS・Zは不明。第2次成形は凸面に平行叩き目を残すものが3点ある。それ以外は縦方向の笥で削って叩き痕跡をまったく消去している。凹面はほとんど無調整、布目圧痕をそのまま残す場合が多い。使用している布はすべて平織りの布。成形具は木型を使用していると思われる。しかしなかで1例だけ型の下端部（広端部）に高さ約2mmの突起を輪状に取り付けた痕跡を確認できるものがある。

平瓦 第1次成形として確実に成形方法のわかるものではすべて桶巻作りである。桢板痕跡・1枚布の使用していることから判断できる。一枚作りについては明確な痕跡を見出せなかった。残念ながら今回の資料からだけではその存否を断定できない。

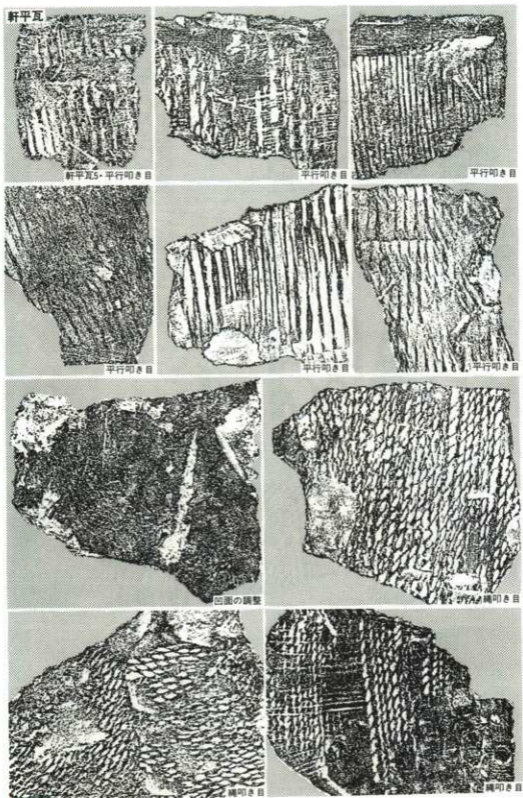
第2次成形については叩き目があるもの（4種類）と叩き跡に縦の笥削りで叩き痕跡を消したものの大きく2種類に分けられる。斜格子叩き目は2種類に分類できる。1例は板の端に格子の突起4個の山が一部取れた痕跡がある。凹面の調整はすべて縦の笥削り。笥削りを入念に行うものと布目を少し残すものがある。正格子叩き目は格子目の大小で少なくとも2種ある。凹面の調整は縦の笥削り。全平瓦中の相対的な出土量は少ない。平行叩き目は凹面は笥削りを行うものと布目を残すものの2種あり、相対的には前者が群を抜いて多い。縄叩き目の凹面は無調整で、布目をそのまま残す。無文叩き目としたものには、凹面を笥で削るものと布目を残すものの2種あり、相対的な出土量は両者ほぼ同数。凸面の叩き痕跡については板端が不明瞭で文様のない叩き板なのか、撫で付けて成形したのか確実なことはいえない。相対的な出土量は平瓦のなかではもっとも多い。

特殊瓦 玉縁平瓦が1例ある。小片のため詳細は不明。凹面の曲率から判断して平瓦とした。平瓦の凸面に断面三角形の粘土を補填して、玉縁部との段差を作り出している。凹・凸面とも磨滅が著しく成形・調整痕跡はほとんど観察できない。蟻羽瓦にあたる形態。蟻羽に茸かた

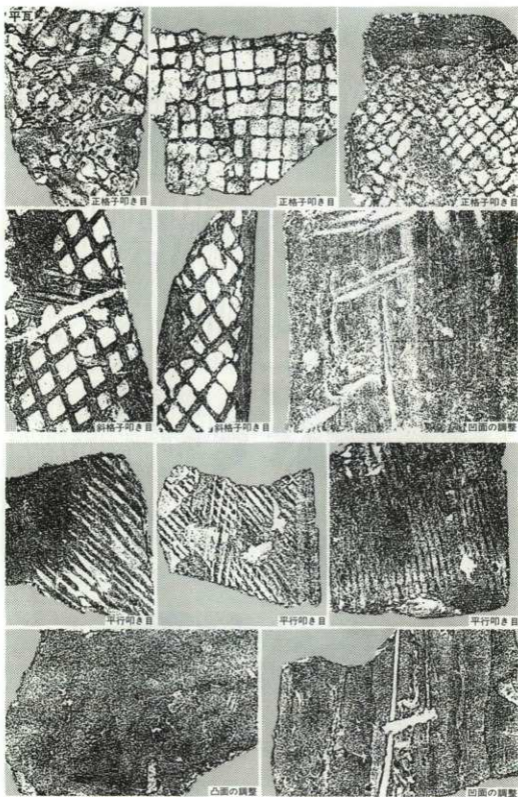


(縮尺2分の1)

第10図 III区出土遺物(1)

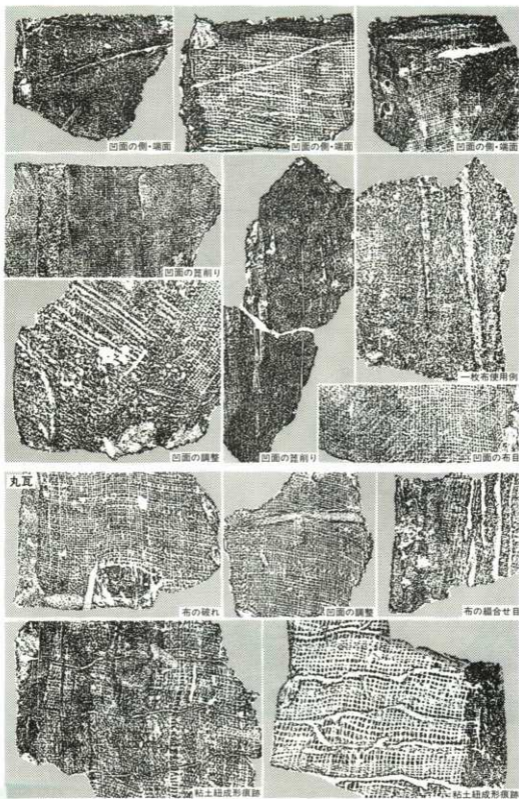


第11図 Ⅲ区出土遺物(2)



平瓦 (縮尺2分の1)

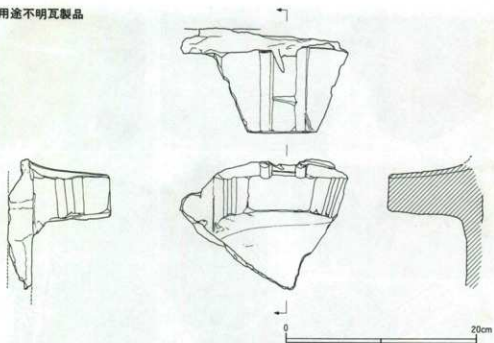
第12図 III区出土遺物(3)



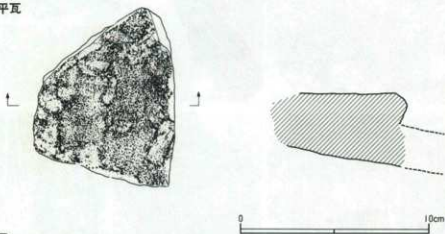
平瓦・丸瓦（縮尺2分の1）

第13図 III区出土遺物(4)

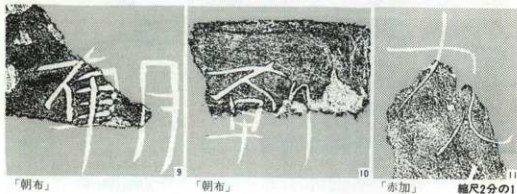
用途不明瓦製品



玉縁平瓦



文字瓦



「朝布」

「朝布」

「赤加」

縮尺2分の1

第14図 III区出土遺物(5)

と確定できれば、ある程度建物構造を限定できる。県内の出土例には我孫子市日秀西遺跡・市原市二日市場廃寺がある。

文字瓦 3点出土。いずれも文字は部分的にしか残っていないが、龍角寺の文字瓦として従来より知られているものである。用筆はいずれも相当乱れている。なお図では従来の資料を参考にして用字の不足分を推定で示す。9・10は「朝布」の「朝」の一部。平瓦の凸面に書く。10では端面が遺存することから、端縁から2.2cm離れたところから書きはじめているのがわかる。10は9と異なり第8画が第4画のところまでのび、両者の字体からうける印象が異なる。工具も異なったものを使用している。11は平瓦凹面を縦に寛削りして平滑にしてから書かれている。字の解釈には不確かなところもあるが、出土例から判断するかぎり、「赤加」の「加」の一部とするのがもっとも妥当と判断した。「加」の第3画・第4画に特徴があり、作りをル股状に跳ねる。「朝布」については現在に残る近隣の地名に麻生があることから、地名あるいは人名に由来するものと考えられている。それ以外の文字瓦の文字も、たとえば「加刀利」・「加刀入」・「服止乃」などが同じように解釈されている。「赤加」については該当する地名もなく、工人名ともされているがまだ確証はない。

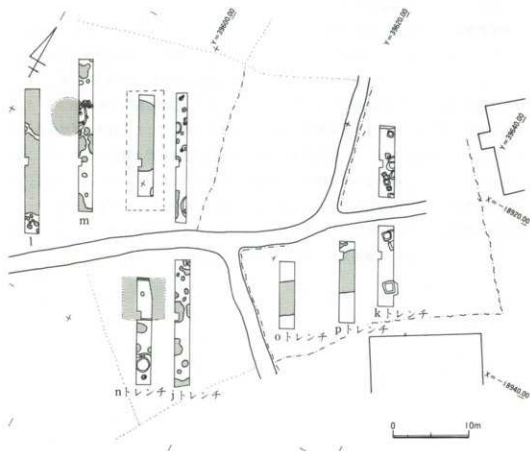
不明瓦製品 1点の破片資料で全体がうかがい知れないために不明とした。胎土に雲母粒を多く含む点で他の瓦製品とは異なる。それ以外の砂粒などの混和物の含有は他の瓦類とあまり変わらない。形状は平坦な器胎(厚み約2.6cm)の一部に4.0×10.5cm、高さ6.5cm、断面台形の厚板状粘土を貼りつけて立体的に工作したものである。そして各面に幅広(0.6~0.8cm)の沈線を2条ずつ入れる。沈線は上面・側面の2面には沈線を省略している。各面の調整痕跡の精粗を比較すると沈線の有無から、製作工程ですでに可視的な面を前提に製作されていることがわかる。したがって沈線のない面は機能上、視覚的に遮蔽された部分にあたることになる。遮蔽物は具体的には同一の器胎面上の対向位置にある同様の突起物、もしくは組合うなんらかの構造物・構築物で死角になることを予想できる。いずれにしても今回の限られた資料からでは明らかにできない。類例の増加をまって再度検討したい。

4. IV区の遺構と遺物

IV区は現龍角寺境内から南西に約150mの地区で、今回の調査においては274m²の調査を実施した。現況は畑地であるが、縄文土器片・土器器片がかなり採集でき濃厚な遺構存在が予測された。全体に西に大きく張り出した台地平坦面の西隅に当たり、西側の谷に臨み標高29mを計る。1・mトレンチおよびn・jトレンチの4区以上を設定した畑地は全体に削平した状況がうかがえ表土層は15cm以下でハードローム面が確認面であった。また、o・p・kのトレンチを設定した地区は、旧屋敷地であり、50cmから1m前後の削平が行われたとの伝聞もある。なおトレンチ名は調査着手順である。

遺構 1トレンチはほぼ全面に落ち込みが確認され、遺構の判断が明確にできなかった。o 1区から3区にかけての落ち込みや4区の落ち込みは深さ20～60cmと一定しないが遺物の出土状況からして縄文中後期の住居跡あるいは土壇と考えられ重複している可能性も高い。

m 1区の落ち込みは焼土を多く含む住居跡の可能性が高い。4区については、縄文時代中期の住居跡を確認した。確認面で住居内理壁が確認されたので遺構内調査も実施した。地表面か



第15図 IV区遺構分布図 (1:500)

ら土器の口縁まで34cmという状態で検出され、遺構もかなり耕作等に伴い削られているものと思われるが、壁高20cm程度を計り床面はあまり平坦で無く軟らかい。覆土には焼土粒を多く含み、一部には焼土塊も認められた。埋壔はピット内に正位で検出された。径5m前後の円形の住居跡と想定される。遺構内および周辺のピットも調査したが個々の性格は明らかでない。

n 1区では土壌とピットが検出され、遺構内調査を実施した。土壌は、長径205cm・短径170cm・深さ72cmの規模をもつもので、底面は平坦で堅くしまっていた。土壌内からは縄文中期・後期の土器片が検出されたが明確な伴出資料は無い。

n 2区の土壌状およびピット状の落ち込みは内部調査していないが、ボーリングステッキによる確認ではいずれも60cm前後の深さを持つ。

n 3区では平安時代の住居跡を確認しトレンチ内の内部調査を実施した。トレンチ内ぎりぎり南北両側の壁を検出することができ、一辺5.6mの住居跡を想定した。壁高は35～40cmあり幅15～20cm・深さ10cm前後の壁溝が巡る。床面にピットが確認でき支柱穴と思われる。床面は堅く平坦でしっかりしており、IV区の土師器・須恵器のほとんどは本住居跡覆土中からの出土である。床面から20cm程のところの部分的に硬い面を確認でき、あるいは貼床による住居跡が重複しているものと思われる。

n 6区から8区にかけて落ち込みを確認した。ボーリングステッキによる深さは40cm程度で1軒の住居跡を想定するなら8～9mの大形になる。遺物は縄文後期のものが多い。

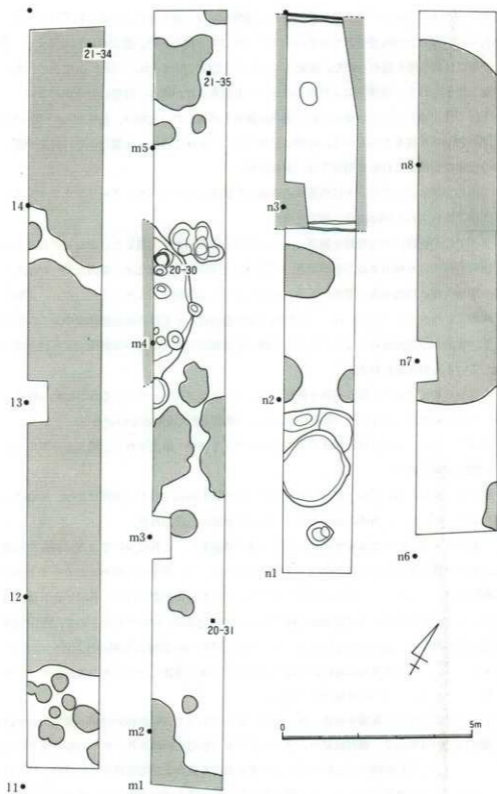
j 1区から4区にかけては土壌状の落ち込みとピットが多く検出された。縄文土器の出土量はこの地区が最も多い。

j 5区では東側に径4～5mと推定される円形の住居跡が確認された。壁高は30cm、床面は若干凹凸があるが、硬い。西側の落ち込みは方形の住居跡かと思われる。

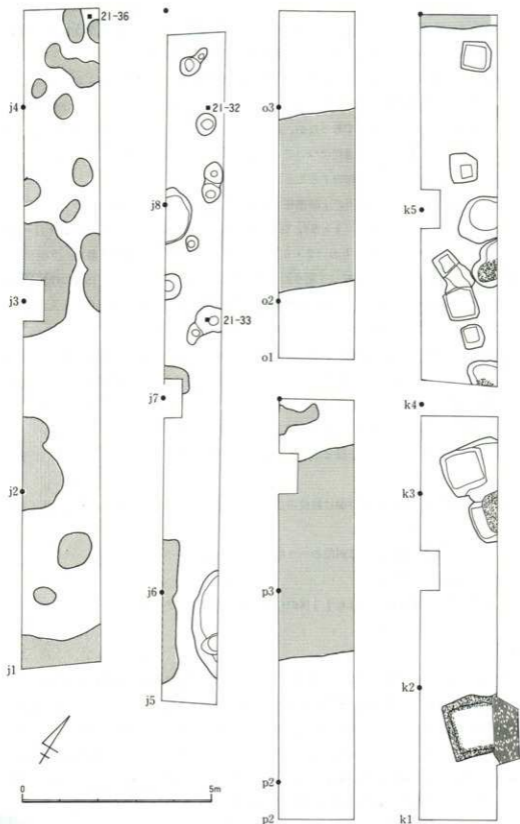
j 7区から8区にかけては6ヶのピットと土壌が確認され、これについては内部調査を実施した。7区の最も南のピットは径60cm・深さ90cmのものだが、底部から65cmのところまで土偶頭部(第21図33)を検出した。7区中程から8区にかけて弧状に配置された5基のピットは、切り合うものなどもあるが、ほぼ径40cm前後で深さも50～70cmのしっかりしたもので円形住居跡の柱穴と推定される。この並びで円をえがくとすれば径8～9m前後の大形の住居跡となろう。

o・pのトレンチでは東西方向に走る幅9m・11mの溝を確認したが近世の陶磁器片など多く、kトレンチではつなかりを確認できない。

k 1区では江戸時代の墓塚を確認した。東側を捜乱で失っているが155×140cm深さ20cmを計る。墳底は120×120cmで、墳底縁部から四方の壁に青白色粘土が貼られ、あるいは充填される。四面に合計28本の角釘が残り、完形の盃1点と寛永通宝6点および陶磁器片4点が伴った。おそらく規模及び釘の遺存状況からして座棺と思われるが、深さは20cmしかなく地表面から墳底でも35cmしかないので、この地区が削平されたという記憶を裏付けるものと思われる。



第16図 IV区トレンチ図(1) 1・m・n トレンチ (1:100)



第17図 IV区トレンチ図(2) j・o・p・k トレンチ (1:100)

k 2区から5区には方形のピットを多く検出した。方向・間隔など綺麗に揃うものは無いが柱穴の可能性もある。ただし、遺物は近世陶器・瓦で近世以降のである。

遺物 IV区では、土師器・須恵器および多量の縄文時代中期から晩期におよぶ土器および12点の土偶という調査面積からするなら類例の少ない量を得ることができた。龍角寺の範囲確認という趣旨から予想外の成果であったが、重要な成果と言えよう。以下、奈良平安時代の遺物を中心に報告し、縄文時代の遺物については主要なものについてのみとし、縄文時代の遺物の詳細については機会は改めて報告することにした。

1～15・18・19はロクロ使用の土師器杯である。底部回転糸きり無調整のもの(9)、底部回転糸切り後静止ヘラ削りのもの(1・3)、回転糸切り後回転ヘラ削りのもの(4・10・11・12・14・19)、底部全面ヘラ削りのもの(2・6・8)がある。体部下端の調整は静止ヘラ削りのもの(1・3・8・9・11)、回転ヘラ削りのもの(4・10・12・14)がある。18は口径15.7cm・19は口径16.3cmの大形の杯で、いずれも内面黒色処理が施され横位のヘラミガキが入念に施されている。17は外面にも僅かながらヘラミガキが認められる。

墨書資料は5点で、12の底部にも墨痕が認められるが判読できない。13は体部外側に「亘」、14も体部外側に「田」、15は体部外側に「真亘」、16は底部に「永」、17須恵器杯の内側に「乙」が書かれる。

20・21は須恵器の杯で底部は全面ヘラ削り処理される。

22は須恵器の蓋で径14.9cmを謀る。端部に僅かに反りを有し、天井部は回転ヘラ削りが施される。

23～26は須恵器の甌で体部外面は縦位の並行叩き目が施される。26は中央に1孔、円を描いて4孔の計5孔のものである。

27・28は土師器の甕で胴部は斜位のヘラ削りが施される。

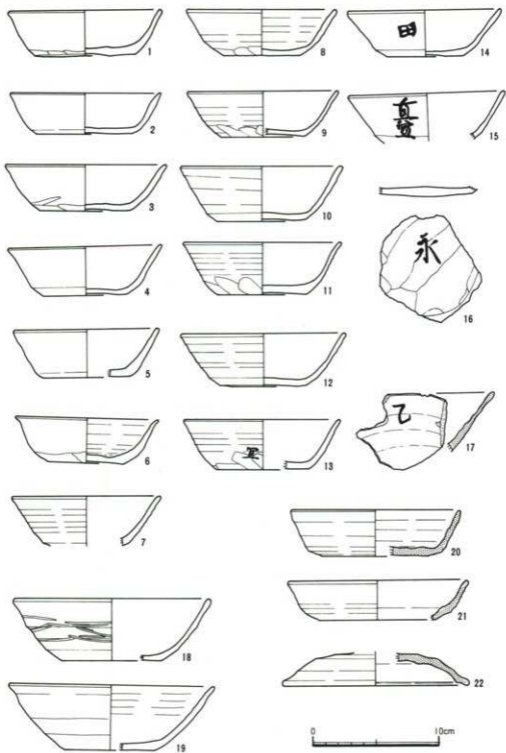
29須恵器甕の口縁部である。

以上の土師器・須恵器はいずれもj 3区の住居跡覆土内の出土である。

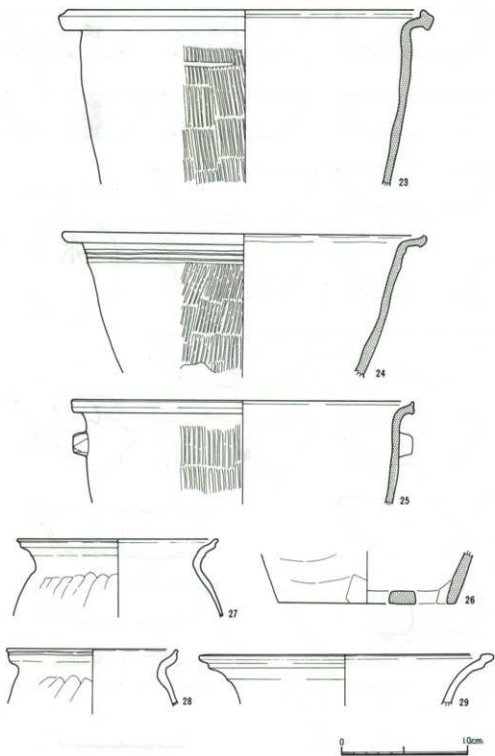
縄文土器

30はm 4区の住居跡内の埋甕で、底部を欠く。口径43cm・底部径9.8cm・器高58cmのキャリパ一型の大型の深鉢で、4単位の波状口縁を持つ、波状部の下に口縁部から下方に伸びる隆線による大きな渦文が基本的な文様で、渦文と渦文の間も隆線で結ぶ。胴部中位は無文帯で丁寧にみがかれる。胴部下半にも、上部の渦文の位置に対応して渦文が施される。渦文部分は縄文によって飾られるが、縄文自体は隆線より先に施文されており、磨消し縄文になる。褐色から黒褐色を呈す。大木の要素が強いが加曾利 EIV の範疇で理解できるものである。

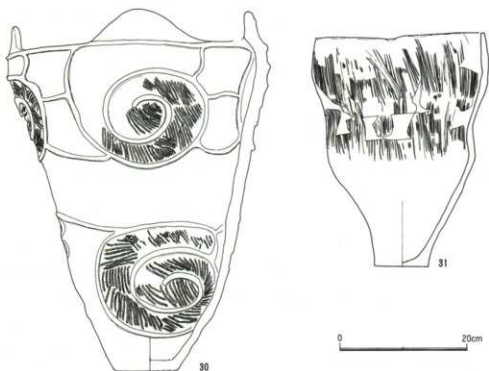
31はm 3区から出土したもので、口径26.5cm・底部8.5cm器高26.5cmを計る。口縁部から胴部



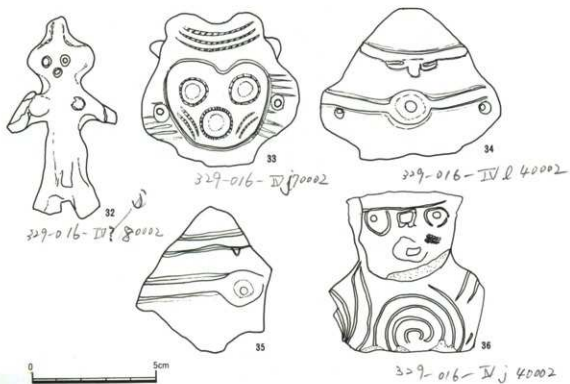
第18图 IV区出土遗物(1) (1:3)



第19图 IV区出土遗物(2) (1:3)



第20図 IV区出土の遺物(3) (1:6)



第21図 IV区出土遺物(4) (1:3)

中程まで縦方向の条線によって飾られる。条線は4本ないし5本組で一部重複する部分もある。加曾利E期後半の所産。

土偶 今回の調査において出土した土偶は、12点で他に地主の榑原氏が採集されていた資料と合せると合計16点の土偶がこの地区から出土していることになる。

32は土偶には珍しい全体の残る小型のもので全長7.8cmを計る。稚拙な土をただ捻っただけと言うような印象を受けるものであり、目・鼻・口の表現も一回の刺突によっている。乳房も粘土粒を簡単に貼り付けたものである。但し、頭部には結髪を思わせる表現があり、注目される資料である。

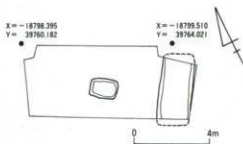
33はミニズク土偶の頭部で、ハート形の顔面表現と頭部表現は典型的なものである。

34・35は山形土偶の頭部で35は破損が著しい。

36は類例の見られない上半部資料で、顔面はやや歪んだ表現をとり左頬部分に縄文を付す。体部の文様は渦文によって飾られる。朱が顔面から体部全面にのこる。頭部には接合痕があるので更に一段付いていたものと思われる。また、朱は剥離した部分も認められるので、土偶の破壊と朱の使用は、朱の使用のほうが後になることが確認でき、土偶の使用法を考える重要な資料といえよう。

5. V区の遺構と遺物

V区は現龍角寺の山門から北東に25mという地区で、伽藍配置的にも龍角寺の範囲の中に当然入るべき地区であり、期待して調査に着手したが庭の一部の調査と言うこともあり、10㎡の調査しか実施できず、十分な成果をあげられなかった。表土層は10cm程度しかなくハードローム面に達した。方形のピットと80×35cm深さ30cmの掘込みを確認したが、いずれも現代の陶磁器片を伴い、覆土も新しいようであった。明治19年の大火のあとこの一帯は片付けのため削平して東に伸ばしたとの話があり、これを裏付けるものと言える。



第22図 V区トレンチ図 (1:200)

まとめ

今回の龍角寺の確認調査は、周辺地域への龍角寺の広がりを確認する調査が主体となり、主要伽藍とは離れた地区の調査であったため、Ⅲ区の瓦を除けば龍角寺に直接係わる資料は得られなかった。しかし、各地区の成果は、龍角寺の範囲を外側から規定する資料とはなりうると思われ、各地区の龍角寺との係わりを中心に成果を纏めてみたい。

Ⅰ区 古墳時代後期から奈良平安時代に至る住居跡が約10軒と掘立柱建物跡の可能性のあるもの1棟が検出され、一般的な集落跡が確認でき、この東側の台地にも龍角寺の直接的施設が営まれた可能性は低いと考えられる。

Ⅱ区 「中門跡」と伝承される地区で期待されたが、ピット列2ヶ所の確認に止まった。攪乱も著しく今後も多くは期待できないであろう。またこの地区は現龍角寺山門から南に直進するいわゆる「白鳳道」との比高差が1 m程度有り、龍角寺そのものの「門」の可能性は少ないであろう。

Ⅲ区 龍角寺の主要伽藍のすぐ裏手であり、龍角寺の範囲内であることは確実であろう。瓦の出土も多く、今回の調査で龍角寺に最も直接係わる地区といえる。遺物が現代のものまで混在する形で出土しており明確でないが地下式墳などは、龍角寺の施設の可能性は高い。瓦は龍角寺の従来の資料に更に類別が加わったといえよう。

今後の調査を考えるなら、今回の調査地の更に北側の「放光院跡」と称せられる地区などは瓦も確認でき有力な候補地といえよう。

Ⅳ区の南西部は、圧倒的に縄文時代中期から晩期の遺跡で、後期を主体とするが土偶の多出など注目すべき遺跡といえよう。また8世紀代の住居跡の存在は、この地域にも龍角寺の直接的施設が存在する可能性は低い。北東部は削平されていて江戸時代の墓跡や方形のピット群など近世以降の遺構の存在を窺わせる。中世・近世においては龍角寺も多くの房が所在したとの記録もあり変遷の調査もまた必要であろう。

Ⅴ区は現龍角寺に近接する地区であり関連施設の存在は期待されるところだが削平されており、より東側の調査が期待される。

龍角寺関係主要文献一覧

石田 茂作他	「古瓦図鑑」	大塚巧芸社	1930
関野 貞	「竜角寺銅造薬師如来像及び古瓦片」『歴史教育』7-4	歴史文化研究会	1932
丸尾省三郎	「竜角寺薬師如来像」『宝雲』3	宝雲舎	1932
服部 勝吉	「竜角寺塔心礎と古瓦」『宝雲』4	宝雲舎	1933
広岡 城泉	「下総国竜角寺」『成田山更新』4-1	成田山	1933
多田 寅松	「竜角寺の薬師如来について」『千葉教育』491	千葉県教育課	1944
高橋 直一	「竜角寺寺名考」『史蹟名勝天然記念物』9-6	刀江書院	1934
氏家重次郎	「史蹟から見た竜角寺」『史蹟名勝天然記念物』9-10	刀江書院	1934
香取 秀真	「竜角寺の薬師銅像」『美術研究』37	美術研究所	1935
大川 逞一	「竜角寺薬師像」『美術』11-12	東邦美術学院	1936
平野元三郎他	「上代仏教遺跡調査予報」『千葉県史蹟名勝天然記念物調査』14	千葉県	1937
平野元三郎	「竜角寺縁起から」『千葉県史蹟調査』1		1936
田中 重久	「塔婆心礎の研究」『考古学』10-5	東京考古学会	1936
石野 瑛	「相模武蔵に於ける古刹と出土瓦」『夢殿』19	故郷舎	1939
田口 信行	「竜角寺もうで」『画説』36	東京美術研究所	1939
藤崎 四郎	「竜角寺文字瓦考」『考古学雑誌』30-4	日本考古学会	1940
稲葉 隲作	「竜角寺について」『千葉文化』2-4	千葉県中央図書館	1940
日本古代文化学会	「竜角寺」『古代文化』12-6	古代学協会	1941
上田 三平	「下総邦竜角寺の研究」	竜角寺本坊	1942
滝口 宏他	「終戦後早稲田大学に於ける考古学調査について—下総国竜角寺址調査—」		
	『史観』32	早稲田大学史学会	1949
千葉県教育委員会	「国宝銅造薬師如来像」『千葉県史蹟名勝天然記念物調査報告書』2	千葉県	1950
萩原三七彦	「竜角寺の縁起について」『史観』33	早稲田大学史学会	1950
大野 政治	「印旛風土記—竜角寺建立の基礎をなすもの—」『房総展望』5-5	房総展望社	1951
磯崎 四郎	「下総国印旛郡竜角寺管見」『房総探古会叢書』14	房総探古会	1952
金原 省吾	「竜角寺の白鳳仏」『西郊文化』15.16	杉並区史編集委員会	1956
山野辺 薫	「竜角寺の研究」『郷土史資料』5	柏市柏公民館内郷土史研究会	1956
大野 政治	「下総国龍角寺・龍腹寺・龍角寺三山縁起について」	大野政治	1967
滝口 宏	「氏寺の建立」『古代の日本』7	角川書店	1970
川瀬 浩	「竜角寺の伽藍配置」『成田史談』17	成田史談会	1971
佐久間象三	「下総竜角寺」	船橋史談会	1971
平野元三郎	「千葉県上代仏教文化資料録」『千葉県の歴史』4	千葉県	1971
大川 清	「日本古代瓦窯」	雄山閣	1971
滝口 宏	「下総国龍角寺調査報告」	千葉県教育委員会	1972
川戸 彰	「古代・中世の竜角寺1・2」『千葉県の歴史』5・6	千葉県	1973
安藤 鴻基他	「上総法興寺 第1次発掘調査概報」	千葉県教育委員会	1977
石井 則孝	「竜角寺の選地について」『房総風土記の丘年報』2	千葉県房総風土記の丘	1978
井上 辰雄	「卜部の研究」『歴史人類』6	筑波大学歴史・人類学系	1980
多字 邦雄	「下総龍角寺について」『古代探叢』	早稲田大学出版部	1980
安藤 鴻基	「房総七世紀史の一姿相」『古代探叢』	早稲田大学出版部	1980
松山 鉄夫	「龍角寺銅造薬師如来像について」『仏教藝術』135		1981
飛鳥資料館	「山田寺展」	飛鳥資料館	1981
五代 吉彦	「房総の古代寺院跡について」『房総風土記の丘年報』6	千葉県立房総風土記の丘	1983
大野 政治	「竜角寺薬師如来発見の端緒」『印波』13	千葉県立房総風土記の丘	1983
多字 邦雄	「下総龍角寺考」『研究紀要』	早稲田実業学校	1985
多字 邦雄	「下総龍角寺文字瓦考」『古代探叢II』	早稲田大学出版部	1985
小山 和	「下総の美しい白鳳仏 龍神伝説の龍角寺」『法華』741		1987
根本 弘	「龍角寺・竜角寺古墳群関係文献目録」『房総風土記の丘年報』11	房総風土記の丘	1988

写 真 图 版



正面全景（南より）

龍角寺境内

金堂基壇（南より）





塔基壇（西より）

龍角寺境内

塔心礎（西南より）



1. I区全景 (南東より)
2. aトレンチ (東より)
3. a2区住居跡 (西より)
4. b3・4区住居跡 (南より)
5. cトレンチ住居跡 (東より)





1. Ⅱ区近景
(南より)



2. dトレンチ
(南より)



3. fトレンチ
(北より)

Ⅲ区

図版 5



1.i区全景
(北東より)



2.i区溝
(西より)



3.地下式墳
(西より)

1. IV区遠景
(南より)
2. nトレンチ住居跡
(北より)
3. jトレンチ
(北より)
4. j7区土偶出土状況
5. j4区土偶出土状況





10-1



軒丸瓦
2:3

10-4



軒平瓦
2:3

10-5



14-1



14-2

文字瓦 1:2

14-3



用途不明瓦製品 1:2

329-016
14-4
1001



5-1



18-1



18-2



5-2



18-3



5-3



18-5



5-4



18-6

5-1~5-4 I区出土の土師器
18-1~18-6 IV区出土の土師器

遺物(3)



18-7



18-11



18-8



18-12



18-9



18-18



18-10



18-22



18-13



18-14



18-15



18-16

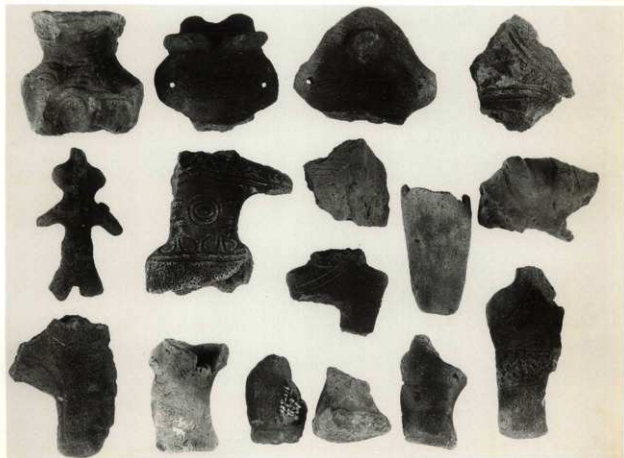
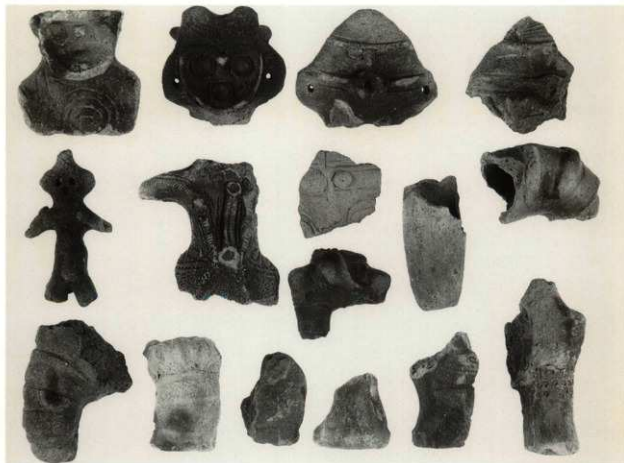
18-7~12・18-22 IV区出土の土師器・須恵器
18-13~16 IV区出土の墨書土器

遺物(4)

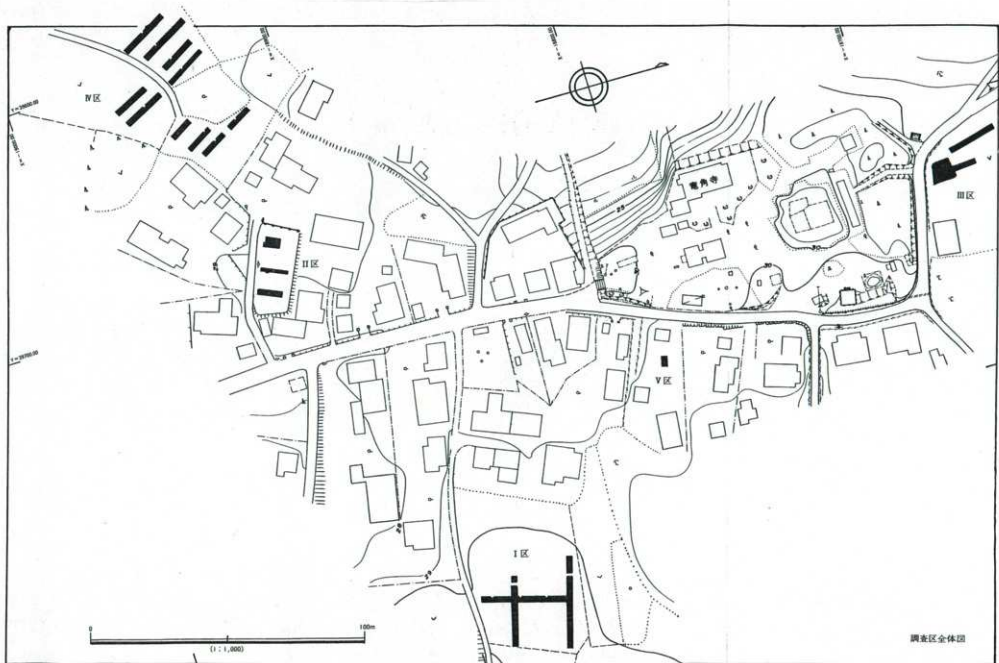


IV区出土の縄文土器・石器

遺物(5)



Ⅳ区出土の土偶



千葉県文化財センター調査報告第167集
栄町龍角寺確認調査報告書

平成元年3月31日発行

発行 財団法人 千葉県文化財センター
千葉市葛城2丁目10番1号

印刷 有限会社 正文社
千葉市都町2丁目5番5号

本報告書は、千葉県教育委員会の承認を得て
増刷したものです。